



かながわ地域日本語教育フォーラム

地域日本語教育に多様な担い手関わるために

本日の流れ



本日の流れ

- ◆日本にいる在留外国人の現状と多文化共生政策
- ◆地域日本語教室の役割
- ◆地域日本語教室の現状
- ◆地域日本語教室と学生ボランティア

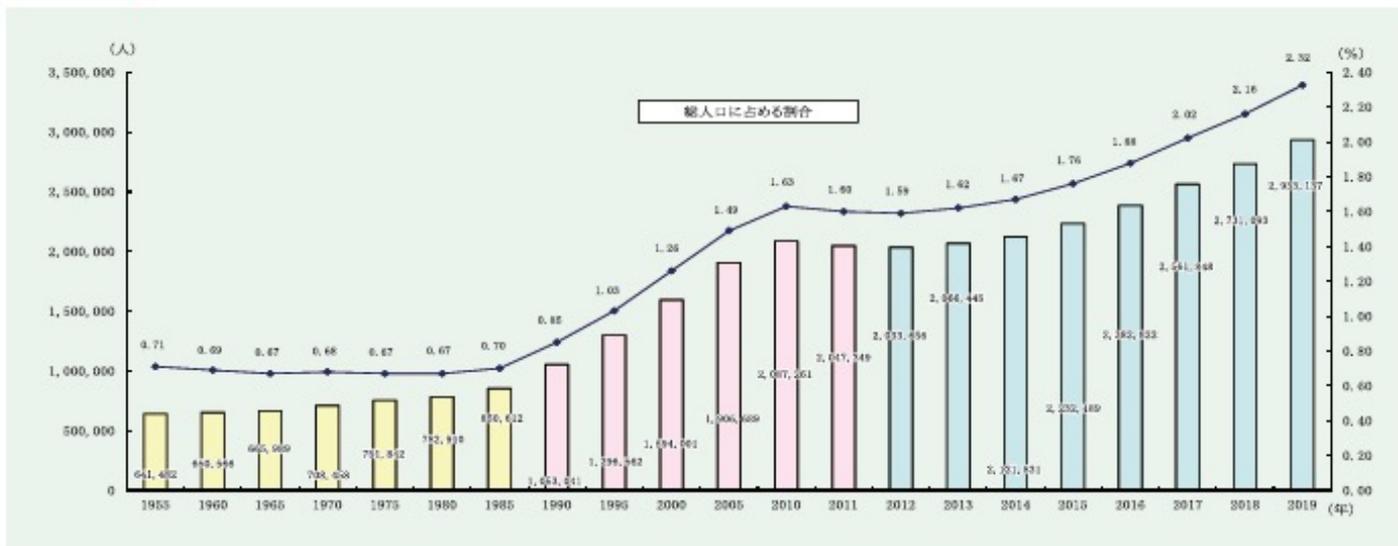


◆ 日本にいる在留外国人の現状と多文化共生施策

日本にいる外国人の現状



図表21 在留外国人数の推移と我が国の総人口に占める割合の推移



(注1) 本数値は、各年12月末現在の統計である。

(注2) 1985年末までは、外国人登録者数、1990年末から2011年末までは、外国人登録者数のうち中長期在留者に該当し得る在留資格をもって在留する者及び特別永住者の数、2012年末以降は、中長期在留者に特別永住者を加えた在留外国人の数である。

(注3) 「我が国の総人口に占める割合」は、総務省統計局「国勢調査」及び「人口推計」による各年10月1日現在の人口を基に算出した。

- 2019年末現在の在留者は2,933,137人。2018年末現在と比べ202,044人(7.4%)増加(ちなみに、2019年6月末で2,951,365人)

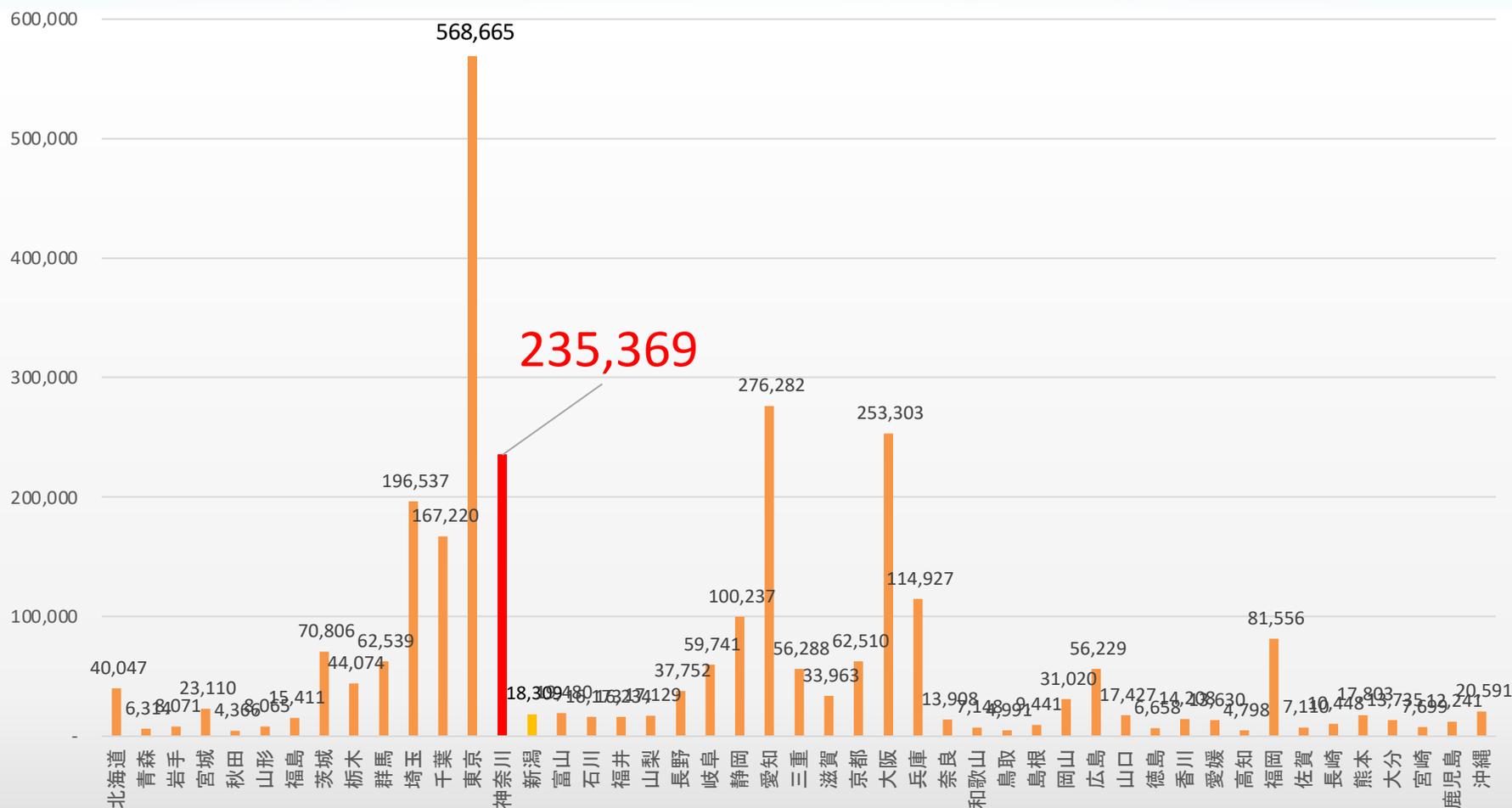
- 在留外国人数の我が国の総人口に占める割合は2.32%

- 法務省2020年版「出入国在留管理」より

日本にいる外国人の現状



都道府県別在留外国人数



法務省2020年6月末「在留外国人統計」より筆者作成

多文化共生施策とはなにか？（国の動向）



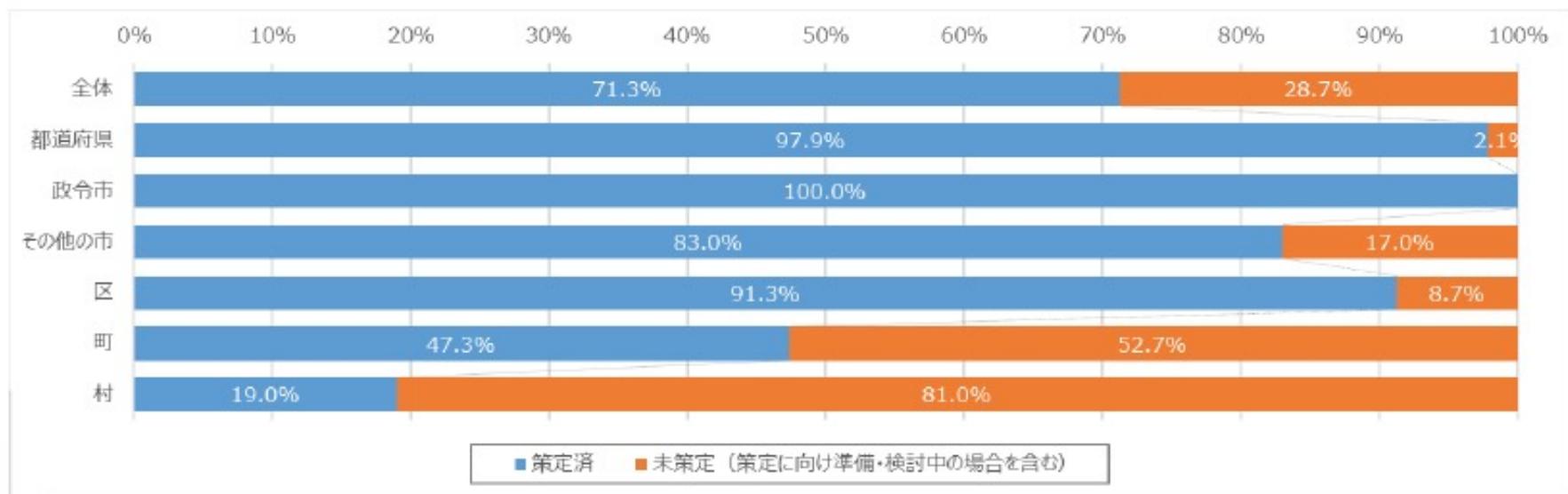
- 2005年に第1回「多文化共生の推進に関する研究会」を総務省が開催
- 2006年「総務省「地域における多文化共生推進プラン」を策定。
- 2019年第2回目「多文化共生の推進に関する研究会」。
- 2020年その報告書発表

多文化共生施策とはなにか？（国の動向）



● 全国の多文化共生指針策定状況

選択肢	回答（団体数）								
	全体	自治体区分別						指針策定状況別	
		都道府県	政令市	その他の市	区	町	村	策定済	未策定
回答総数	637	47	20	336	23	169	42	454	183
1 策定済	454	46	20	279	21	80	8	454	0
2 未策定（策定に向け準備・検討中の場合を含む）	183	1	0	57	2	89	34	0	183



多文化共生施策とはなにか？



- 地域における多文化共生を推進するための具体的な施策.
- 1. コミュニケーション支援：
 - (1)行政・生活情報の多言語化、相談体制の整備. (2)日本語教育の推進 (3)生活オリエンテーションの実施
- 2. 生活支援
 - 教育機会の確保
- 3. 意識啓発と社会参画支援
 - (1)多文化共生の意識啓発・醸成 (2)外国人住民の社会参画支援
- 4. 地域活性化の推進やグローバル化への対応
 - (1)外国人住民との連携・協働による地域活性化の推進・グローバル化への対応 (2)留学生の地域における就職促進



◆地域日本語教室の役割

◆地域日本語教室の現状？



-
- 日本語教室は、外国籍住民にとって、純粹に日本語を学ぶ場だけではなく、日本人とのつながりの場であり、「承認」の場。

◆地域日本語教室の役割？



- 「つながり」とは、「社会関係資本」とか「ソーシャルキャピタル」という言葉で説明されることもある。
- •→誰か人と繋がりを持つことが有形無形の財になるという考え方。
- •→特定の人との関係性を作れることが、日本社会における「包摂」感を感じさせる。
- •→「包摂」とは、排除の反対の言葉。
- •→排除されない場としての日本語教室は非常に重要。
- •→「相手を否定しない、全てを受け入れてくれる場」という定義。「全てを受け入れ」なくても、排除をしない場所

◆地域日本語教室の役割？

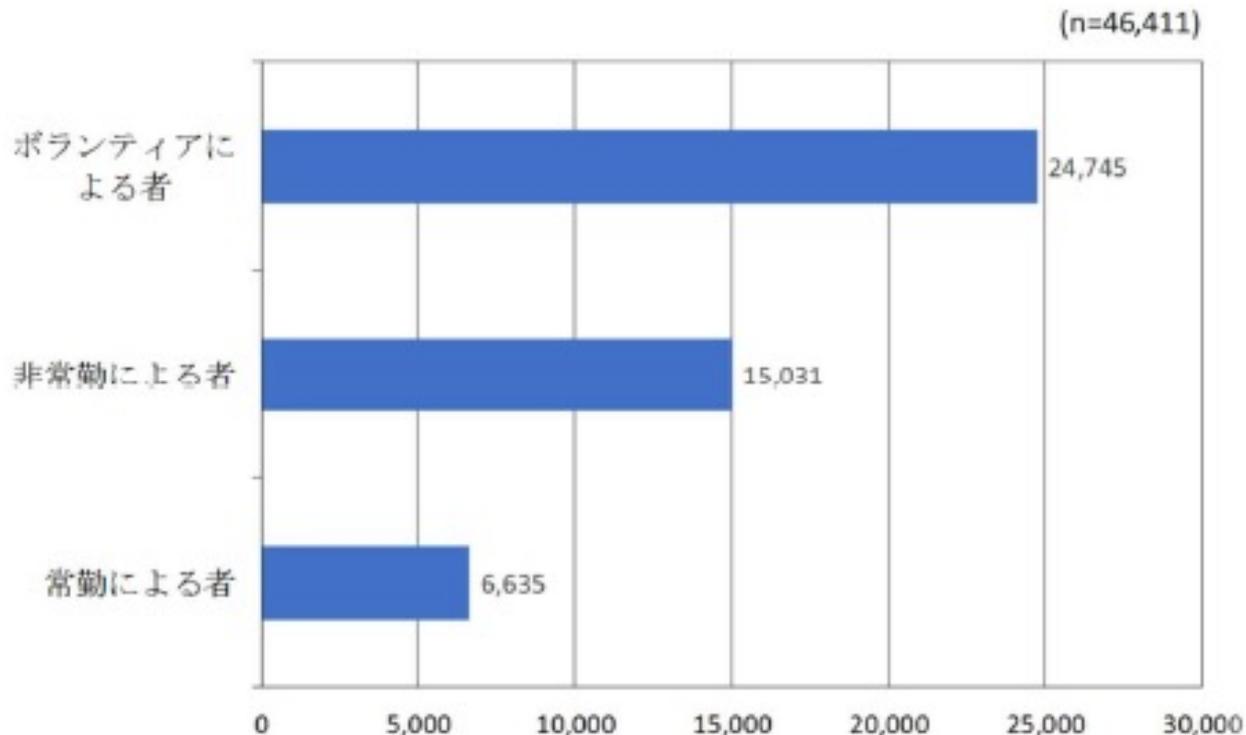


- 「承認」とは社会で認められているという認識
- •→これも「包摂感」とも関係している。排除されていない、という感覚は、同時に「認められている」という認識にもつながる。
- •地域社会の中で、外国籍住民が、日本社会を支えている感を得られる場づくりが多文化共生には重要
- •→その一翼を担う「地域日本語教室」



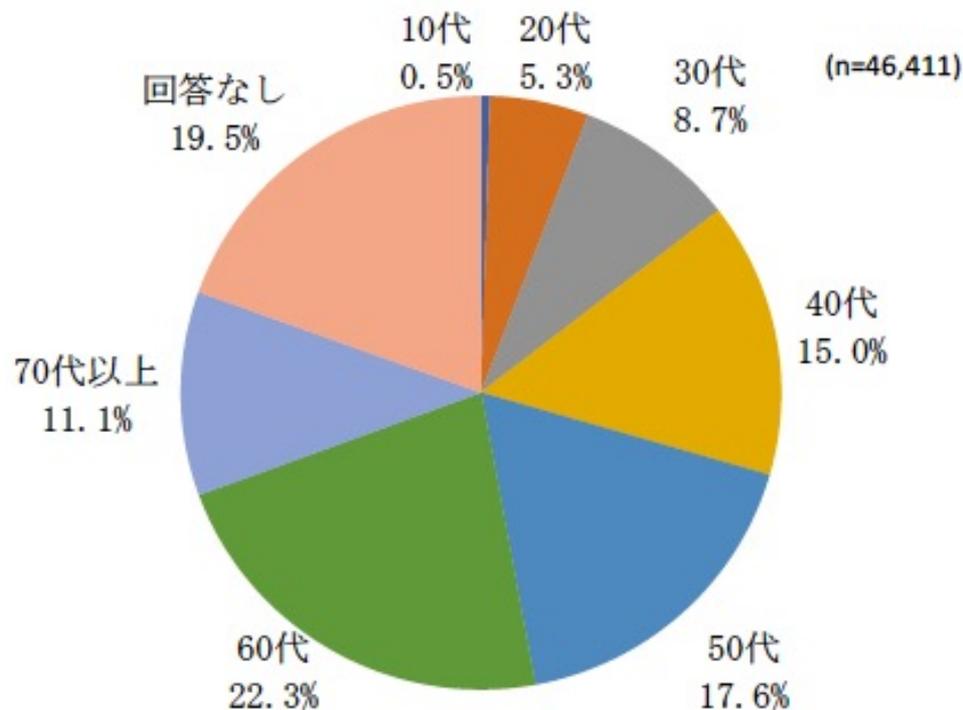
◆地域日本語教室の現状

◆地域日本語教室の現状？



- 地域の日本語教室は、圧倒的にボランティアに支えられている。

◆地域日本語教室の現状？



- ボランティアの年齢層で一番多いのは60代。続いて、50代、40代、70代。
- 20代は5.3%。→ここをもう少し拡充したい。



- 地域日本語教室と学生ボランティア

地域日本語教室と学生ボランティア



そもそも学生はどんなボランティアをしている？

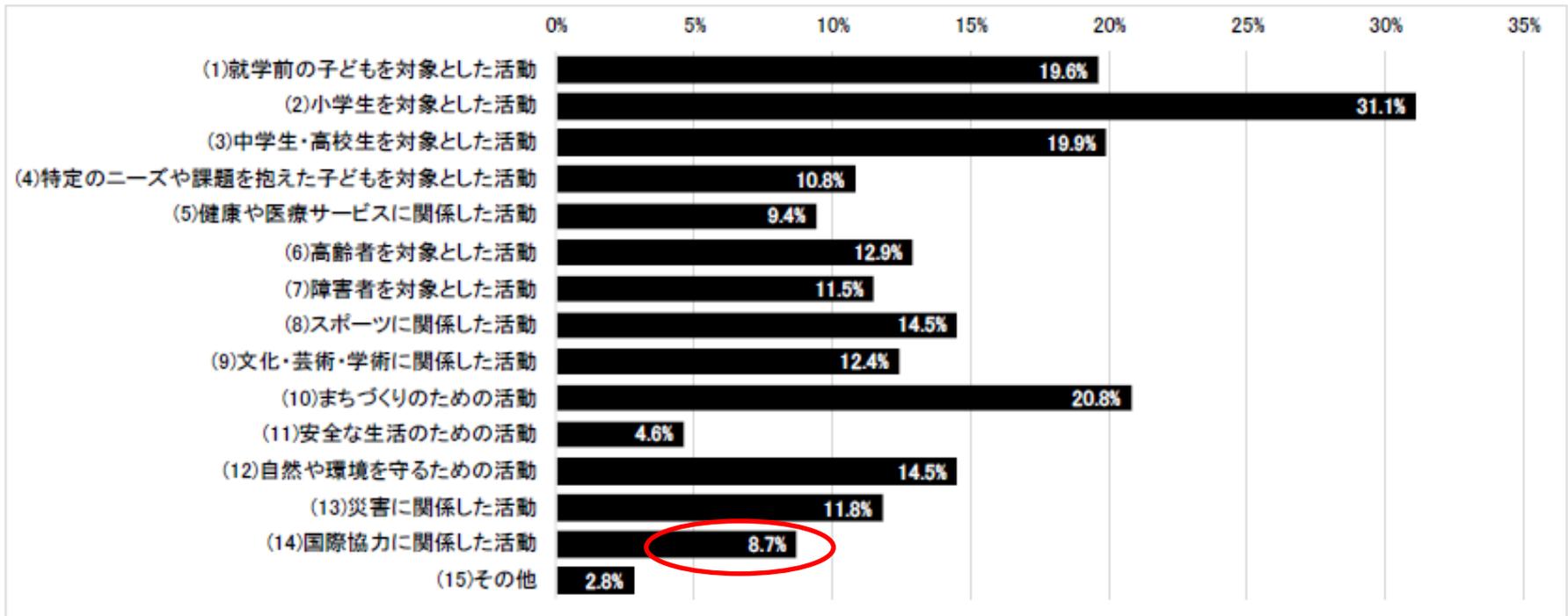


図 2-3-1 「自主的に参加」した活動の内容（複数回答・n=668）

「大学生のボランティア活動等に関する調査」より
独立行政法人国立青少年教育振興機構
令和2年（2020年）3月

地域日本語教室と学生ボランティア



活動に参加して良かったと思っていること

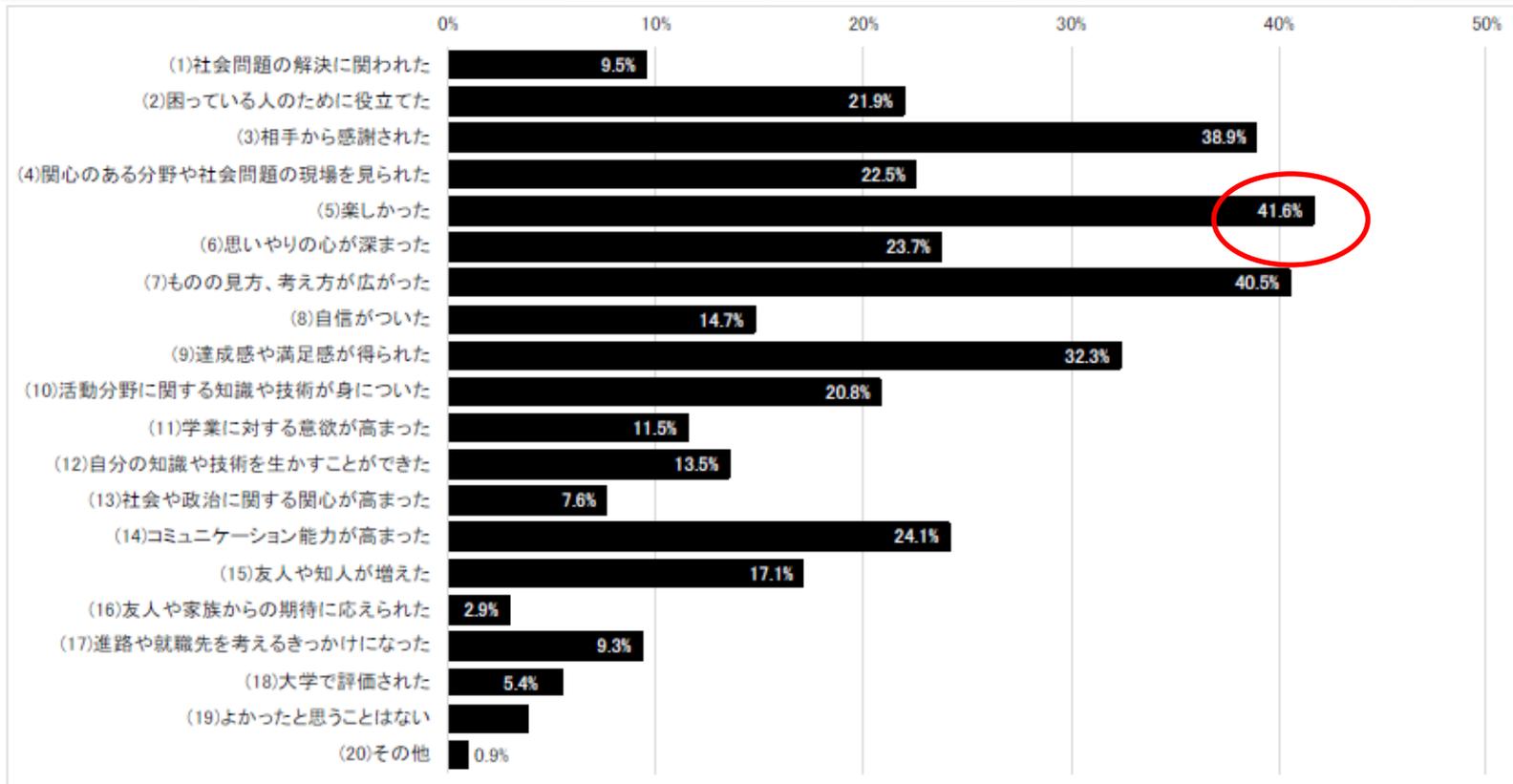


図 2-6-1 活動に参加してよかったこと (複数回答・n=817)

「大学生のボランティア活動等に関する調査」より
独立行政法人国立青少年教育振興機構
令和2年(2020年)3月

地域日本語教室と学生ボランティア



活動に参加して良くなかったこと

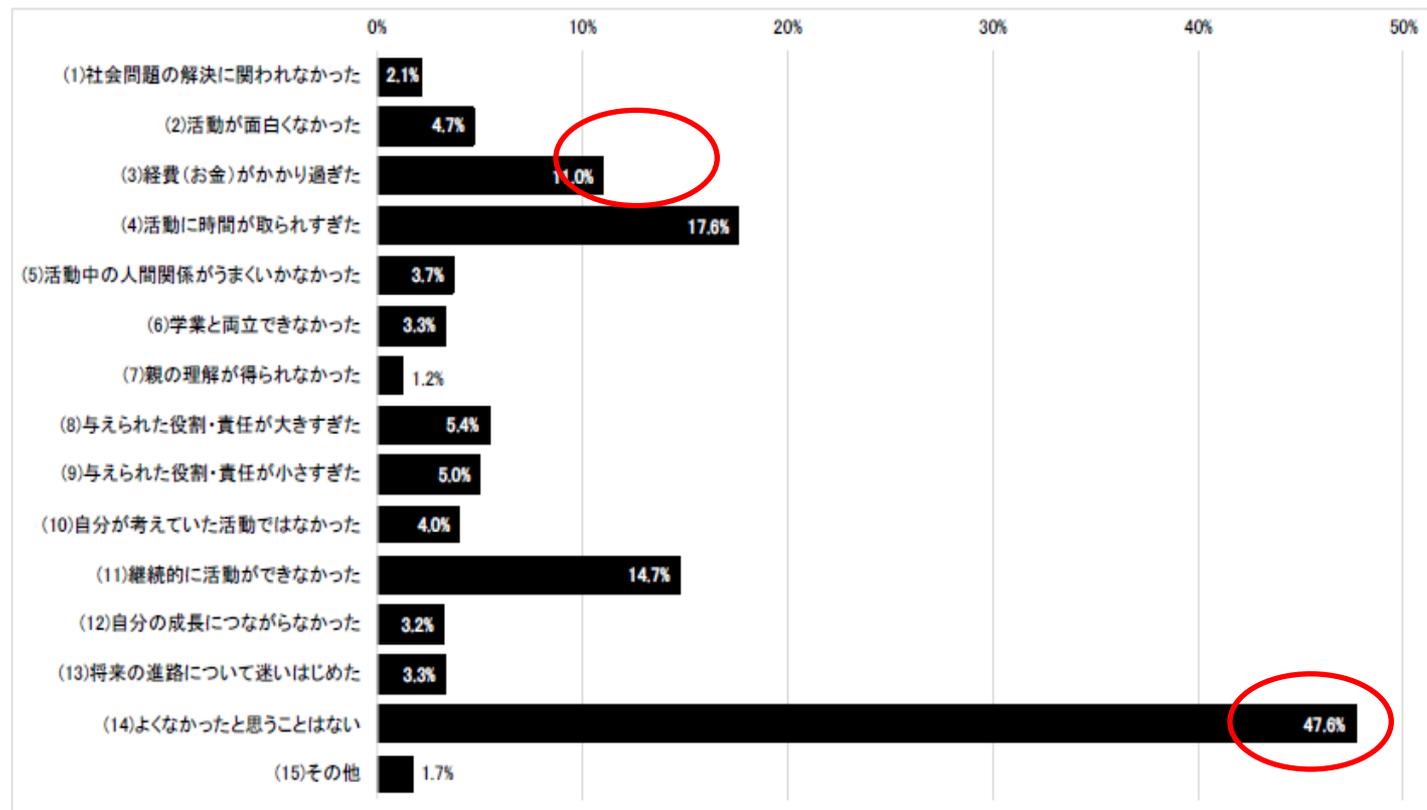


図 2-6-4 活動に参加してよくなかったこと (複数回答・n=817)

地域日本語教室と学生ボランティア



- 学生は...
- ボランティアに参加すれば、楽しいと思っている。
- 人に感謝されて嬉しくて、物の見方が広がったとしている。
- 一方、活動時間がたくさんになると、時間が取られすぎると感じ、継続できなかつたと思う。

地域日本語教室と学生ボランティア



- 大学生はものの見方が広がるのが、参加した成果だと感じている。
- 社会課題に関われたと感じる学生は多くないものの、現場で社会の課題に触れることは、学生にとっては重要な機会。普段授業では接しない、現実を見ることができる貴重な場。
- 大学側としては、学生にぜひ地域と接点を持ってほしいと思っている。サービスラーニングの急増はそれを物語っている。

地域日本語教室と学生ボランティア



- その上で、大学は、地域で大学ではない学びを体験してほしいと考えている。
- そこで受け入れ地域の皆さんには、活動の上に学生の面倒を見ることになるが、「地域の先生」として、学びを見守るという役割を担ってほしいと思っている。
- 大学生は「継続性」に問題を持っている場合が多く、受け入れ側から見ると、難点も多い。
- あくまで、学生に社会に関わるきっかけを提供する程度、戦力として過度に期待しないでもらえると良い。

地域日本語教室と学生ボランティア



- あるいは、次に繋げる「種まき」。同じ学生が来続けることはないかもしれないが、大学生がサイクルとしてくることで、次世代を養成する可能性もある。
- そのために、ある程度学生が入ってきやすい仕掛けも検討する余地あり。
- 日本語の指導が完全にできない場合、交流の企画を立ててもらう、実際に交流してもらう、というような補助的なイベントを企画してもらうのも一つの方法？

地域日本語教室と学生ボランティア

